松柏中学校アーカイブ通信　第29号　2024年12月16日発行

きらめきタイム「アーカイブコース」責任者：山村　好克
（タイトルの背景は旧校舎）

松柏中の年の瀬の光景から

今年も残すところあと２週間あまりとなりました。今号は年末特集ということでこれです。1990年代半ばあたりまで続いていた松中生のしめ飾りの行商です。

【1981年12月27日　八幡浜新聞】
写真を「科捜研」してみると、奥に銀座商店街の入口らしきものが確認できる。とすると、レンガ通りか。そして奥の中学生のジャンパーにはしっかり名札が付いている。

その１　しめ飾り売り

リヤカーを引っ張り、八幡神社の下（やレンガ通り）、千代田町の愛媛いずみ前（読者の方はこの店名が分かりますか。もっと前ならニューいずみや明治屋）などでしめ飾り売りを松中生がしていました。1989年の新聞記事では、向灘方面まで「遠征」していたことが報じられていました。市内の他校はいなかったように思います。「年末のしめ飾り売り＝松中生やなあ。」なのです。

なぜ松中生なのかは分かりませんが、しめ飾りの供給元が松柏地区だったことは想像できます。何年か分の新聞記事を読むと、末広の菊池武雄さんの名前がよく登場します。菊池さんの作ったしめ飾りを千丈小児童や松柏中生徒がリヤカーを引っ張って、市内中心部で販売していたようです。1988年であれば、１週間で一人１万～１万４千円の収入になっているようです。売り上げの２割が生徒の収入だったという記録もあります。1984年の記事では、相場が大で1600円、小が600円とありました。裏面には菊池さんがしめ飾りを作っている記事を掲載しました。また、末広大下の宮岡賢夫さん、トメさん夫婦の記事も掲載しました。１年生の宮岡晄志君の高祖父（ひいひいおじいさん）と高祖母（ひいひいおばあさん）に当たります。晄志君のお父さん・佳正さんに確認すると、「曾祖父が作ったしめ飾りは小学生が販売していた。」とのことでした。

その２　餅つき（写真は1976年の様子）

沿革史や地元新聞などで確認できる最も古い開催年が1969年となっています。「校内餅つき」「餅つき大会」等、様々な名前が付いています。1988年では「生徒会歳末行事」となっていました。餅つきの目的やつくお米の量などだが、何年か記録が残っていました。

【1983年】　３斗（30升）の餅米をつき、校区内の独居老人45人に配っています。１人10個ずつです。この年はお餅と生徒持ち寄りのカレンダーや寒中見舞い等も添えて家庭を訪問しています。

【1986年】　４斗（40升）の餅米をつき、50人分を校区内の独居老人、その他に市内の老人ホームや八幡浜学園、少年ホーム、老人ホーム等に配っています。
【1987年】　前年からのつながりでしょう。八幡浜学園の生徒を招いて、一緒に餅つきを行っています。

1987年の餅つきを最後に、様々な資料を当たりましたが、餅つきの記録を見付けることができませんでした。ただし、年末ではなく、少年式の記念行事や文化祭のイベントの一環として1990年代に行っていたと私は記憶していますが、いかがですか。

その３　しめ飾りづくり（写真は1988年の様子）

単独で行ったり、餅つきとセットで行ったりしています。1985年から記録が残っていて、このときの講師は井上傳一郎先生（当時松柏中勤務）でした。1986年以降は末広の山本武雄さんが講師を務められていました。1992年、学校週五日制の導入で、有意義な土曜日の過ごし方が市内各小中学校で検討されました。このとき生まれたのが「松柏ふれあいパーク」で、地域のお年寄りを講師に迎えて昔の遊びなどで交流を深めました。この中にしめ飾りづくりもコースに設けられ、しめ飾りづくり単独の行事が吸収されたと考えられます。（しめ飾りづくりは1994年が最後と考えられます。）

【1979年12月12日　八幡浜新聞】

末広の山本武雄さん

お正月用のシメ飾りづくり急ピッチ

◇……八幡浜市千丈地区の農家などで、正月用シメ飾りづくりが急ピッチで始まっている。末広、農業、山本武雄さん方でも十月末ごろから正月用シメ飾りづくりを始めたが、材料の新ワラは大洲、宇和の米どころから購入したという。

◇……正月飾りは千丈地区で十余軒がつくっており、師走の二十日過ぎから市街地へ売りに出される。お値段は、まだ秘中の秘のようだが、材料高も手伝って昨年よりは高くなりそうだ。

（写真は正月用のシメ飾りづくりに精出す農家の人）。

【1981年12月３日　八幡浜新聞】

末広大下の宮岡賢夫さん（86歳）と妻のトメさん（83歳）

しめなわ作り58年

宮岡さん　仲良く80代の老夫婦

◇…今年も余すところ、一カ月たらずで暮れ新年を迎えるが、正月といえば注連縄（しめなわ）。各家庭の玄関などには欠かせないものだ。禍神（まがかみ）が内に入らぬようにとの意を示して張られる。

◇…市内末広大下の宮岡賢夫さん（86）宅ではいま、賢夫さんと妻のトメさん（83）がこの注連縄作りに精を出している。

◇…宮岡さん夫婦の話によると、昔は誰でもワラジを作る技術を持っており、千丈地区には田んぼが多かったこともあって農家ではみんな作っていた。しかし履き物の変化や、田んぼからみかん畑へと作物の転換により、しだいにそのワラジ作りも消え、注連縄作りへと。

◇…宮岡さんは注連縄作りをはじめて五十八年のベテラン。足ユビや手を器用に動かし注連縄を作って行く。注文も結構多く、向灘地区からは、トロール船に飾る特別注文まである。宮岡さん宅では田んぼをみかん畑へと全部転作したが、数年前に東宇和郡の田んぼを買い材料のワラは自作しているという。

◇…出来上がった注連縄は近所の子供たちが売りに行くが、縁起物だけに病気を忘れた健康そのものの宮岡さんの作ったものがよく売れるという。

（写真は元気な宮岡さん夫妻）。